



星型都市人
岡本連也
毎日新聞社

(3/20刊・¥1100)

アンチ・ユートピア小説である。

星型をした都市、中央部に住む市民、加納は、滅びゆく図書館に勤務している。彼の仕事は、実用に役立つ書物をテープに音声として残し、残り全てを焚書することにあつた。ユートピアには、何一つ不自由はない。都市の指導者の座は、常に空位に保たれ、運営は市民の相互信頼に委ねられていた。だが、ある朝、都市に雪が降る。それまでの日常では、誰も見たことのない天候の異変は、やがてくる破滅と崩壊の予兆をはらんでいた……。

現実の風刺や、パニックを近未来に移しただけでは、アンチ・ユートピア小説とはなれない（第一、小説になっていない例が多い）。しかし、そういう意味でも、無機質な会話が、未来の管理社会の雰囲気を出すのに効果を上げているし、麻生という女に魅かれていく加納の心理も描かれていて、まず水準を満たした内容といえるだろう。ただ、主人公の行動は、社会に対する疑念―不倫の恋―ドロップアウト―脱出と、既存の作品の枠を越えるものではない。あと何か、一貫した主張なり、新しい視点なりが、ほしかったように思う。